

特116

693

繪馬
現在七面
照君

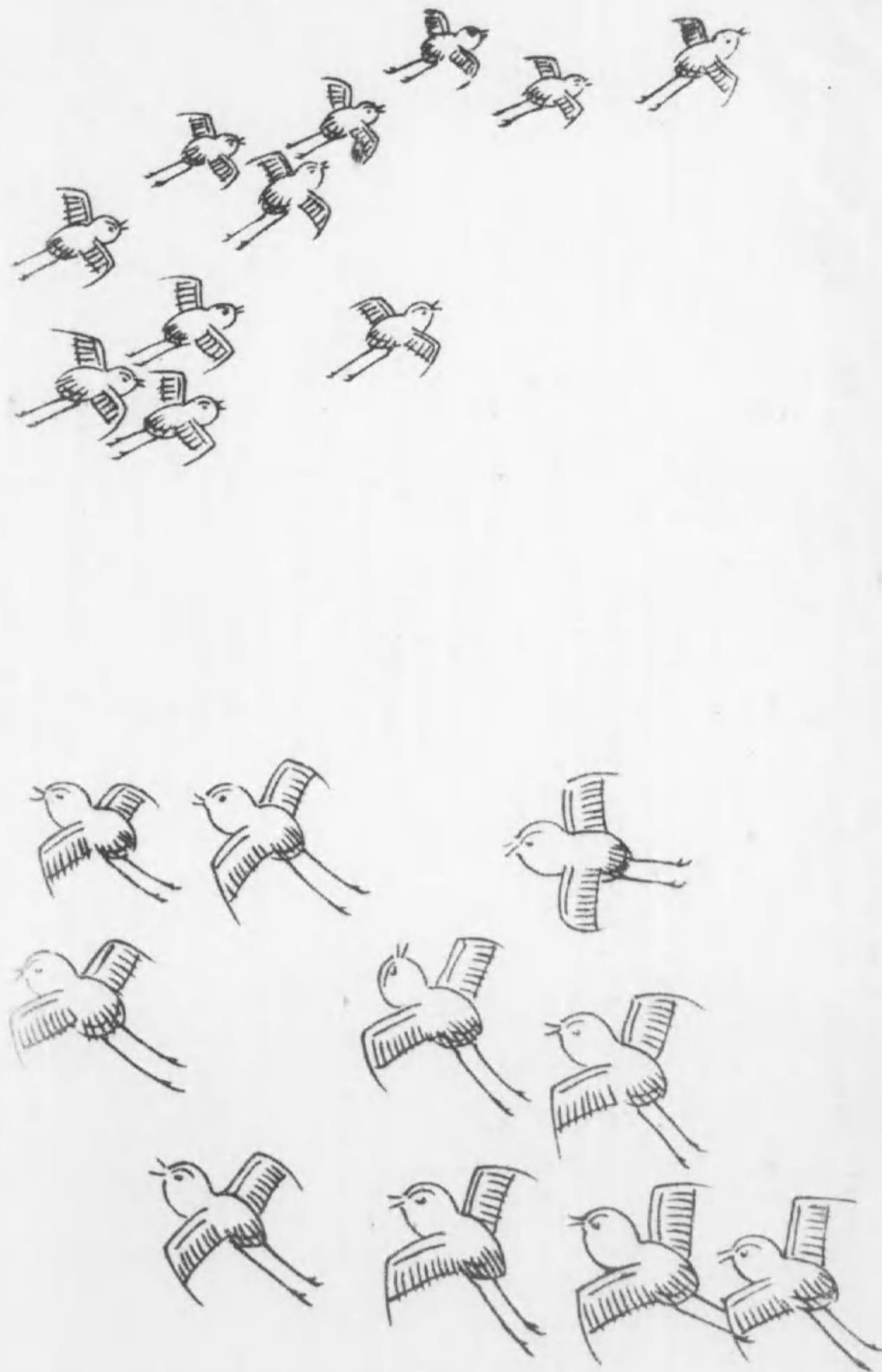
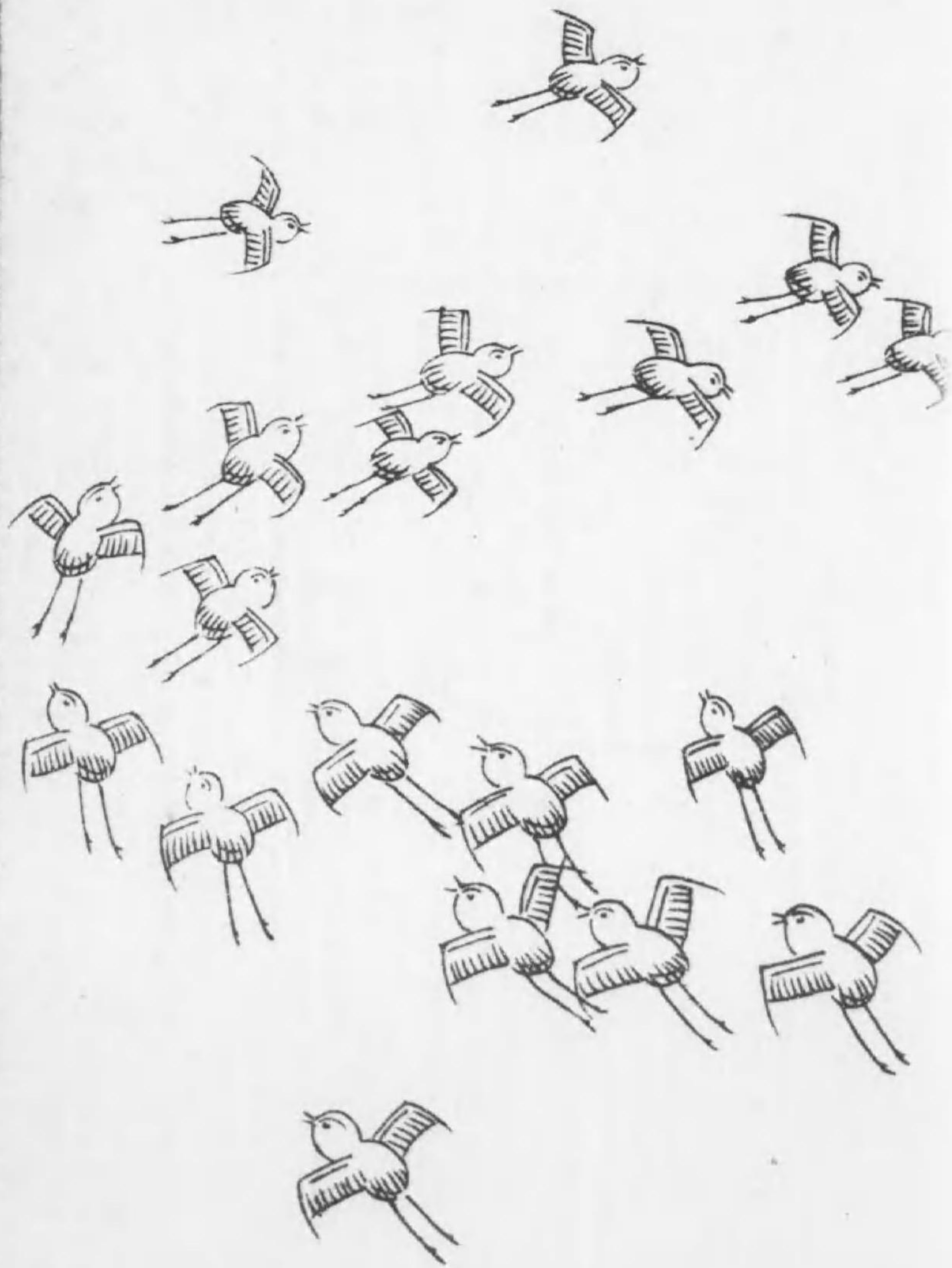
觀世流改訂謄本

別六

5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20

始





觀世清之
長之世

47116
693

繪馬

解題

十二月卅日の夜伊勢齋宮に繪馬を掛くる神事ありといふを脚色したる神事能なり。此曲に作る所は、勢陽雜記に「繪馬齋宮に有、毎歳元日、雞鳴にかくる古例有」云々、伊勢齋宮名所圖會に「齋宮の森に小舎あり、十二月三十日夜繪馬をかくる例なり。(中略)昔齋宮に十二月晦日大祓あつて、祓馬奉りしを、齋宮の儀廢れての儀、繪に掛ける馬を奉りし事の例に成れるにやあらん」云々と記し、又碧山日録にも其事出でたるが、謡曲の典據とも見るべき古き記録見當らず。思ふに齋宮の古蹟に存したる小祠に於て歲暮の夜新しき繪馬を掛けて年を相する風俗のありしを採りて材となしたるものならんか。

能之小書

寛の舞と云ふあり。

謡ひ方梗概

全篇に互り國土豊なるをこほぐ心を専とし、壯嚴にして而も清爽の趣有るを要す。

シテ

前は老人なれば少し抑へて靜なるべきも、位餘り重くなるを好まず。一聲は大きやかに寛りと出、サシは確りとせせる中にさらりとしたる味はひを持ち、下歌にて氣を更へて緩め、上歌より豊に謡ふべ

し、ワキとの問答、掛合は位を保ちて落着好かるべく、承け應へて行く間に漸次氣を乗す。クセの上端は確りと謡ふ。後は雄大に晴れくさあるべし。「われは日本」云々は堂々と、「處は齋宮の」云々はゆつたりと「昔の岩戸に」云々は大大と、「面白や」は確りと謡ふ。

ツレ 老嫗なれば餘り調子を高めざるが宜しけれども、獨り謡ふ處は稍輕めにさらりと運ぶ。連吟の處はよくシテに従ふ。

ワキ 清く健やかに淀みなきやう謡ふを旨とす。

地 初の「かけまくも」云々はさらりと出で、「國土豊になさうよ」と少し鎮め、「賀茂の御あれの」より氣を更へて明かなるべし。クセは稍ゆるやかに起し、上端後は確りめに附け、「信すべし」よりさらりとなり。

正
14. 9. 14
内交

「夜も明けゆかば」以下は少しくかゝりめに、止めの返しにて鎮む。後は「雲は萬里に飲まりて」云々を晴れやかにとつしりと謠ひ、「和光利物は」以下乗つて弛みなく、以下柔剛吟とも颯爽たる姿を得て謠ひ納むべし。

辭解 **伊勢の宮居** 伊勢大神宮。伊勢國度會郡宇治山田。二社あり。一は皇大神宮(天照大神)又は内命を祀れるものとして作る。月讀の明神社は實は内宮別宮の中にあり。

大炊の帝 淳仁天皇 **松本** 近江國滋賀郡大津の東部、馬場の西。 **粟津野** 同上馬場の南よ

邊の **瀬田の長橋** 今栗太郎瀬田村にあり **野路、篠原** 瀬田村の東。 **草枕** 旅寝をいふ古語。 **齋宮** 歴代の天皇即位ある毎に大神宮に奉仕せられし皇

女又は皇女の居給ひし御所。其地は伊勢國多氣郡、今の齋宮村。こゝには其古蹟をさす。 **節分** 立春の時 **繪馬** 神社佛寺等に奉納する馬の畫の類。も

たる馬を奉納したるが始めなり。 **新玉の** 春に冠す **春に心を** 春となりて心を若がへら **去年とや** 古今集に「年

にけり一年を去年とやい。 **馬を華山の** 周の武王の徳を讃美して書經に「歸馬于華山之陽、放牛于桃林

牛を桃林の野に放たす。或は唐船の「唐土の華山には馬を放し、桃林に牛を繋ぐ」より採りたるか。 **華山、桃林、共に要塞の地。** **聖人** 漫然といへるなるべし。或 **賢き世**

の世 **時に別かれて** 時代に **濱の眞砂を** 古今集に「わたつみの濱のよさこそ **千早振る** 神に

る枕 **久方の** 天に冠する枕詞。神代の事を聞くに **天津日嗣位** 一切衆生一切の **愚癡** 事理を解せ

る枕 **無智** 智慧の無 **馬の毛により** 碧山日録に「詣西宮、宮前有畫馬、路人相傳曰、年々分歳夜、除舊置

豊儉、皆以此爲識也、今之繪馬、毛也、不雨不日豊登之瑞也」云々。 **よみちの** 云よみしはもと夜路とありて勇みある世と言ひかけ、萬葉集

ゆかむ」とある歌をほのめかし、夜路の暗きより黒の繪馬と續け、歌道の心を含めて次句に續けたるなるべきを、今冥路の闇きを黒に言ひかけたるものとして、「よみち」と謠へるは心なきことなり。此萬葉集の歌は三日月を詠したるものにて、天上を仰ぎ見れば白眞弓を張りたる如く三日月かゝれり、いざこの月光を浴びて夜路を行かん(略解には「將吉」の字をかきて「よみちはよけん」とあれど、こゝには古義の「將去」とかきて「ゆかむ」と讀めるを採る)との意。暗に此黒き繪馬をかけんとす。 **道の直なる** 耕作の道のひた **尉** 老 **力をも** 嫗が月界を司る月讀命の化現なることをほのめかす。

入れず 古今集序に「力をも入れずして天地を動かす、目に見えぬ鬼神をもあは **八雲をさきとし**

て 同序に「人の世となりて素葦鳴尊よりぞ三十もじあまり一もじは詠みけ **天ざる雪の** 古今集に「梅

見えず久方のあまざる雪のなべてふれはば。一は雲の歌にて雲より雨をふらすものなれば前の「露の恵み」の語に應じ、一は雪の歌にて雪は豊年の兆と言へば前の「國土豊かに」の語に應ず。天ざるとは空の雪にかすみ曇ること。なべて **隙行く駒の** 人の一生の極めて速きを物の隙を走りすぐる白駒に喩へし語。こゝには隙

はおしなべて。 **隙行く駒の** 人の一生の極めて速きを物の隙を走りすぐる白駒に喩へし語。こゝには隙

意を含め、黒き繪馬をかけんとする嫗の月讀命の化現なるに對し、白駒の **雨をも降らし** 黒き繪 **日を**

待ち 白き繪 **かけまくも** 口にかけて言はんも。 **神垣** こゝに **賀茂の御あれ** 山城國賀茂神社に

る、葵の祭。御あれとは神の生れ給ひし日の意。以 **ひをりの日** 古、大内の馬場に行はれし騎射の式日の下、掛くるといふに縁あるものを以て文の綾とす。 **色めく** 隨身の色めく、色めく紙といひつぐ。

五月五日賀茂の社に行はれし競馬 **御隨身** 古、上皇又は大官に **色めく** 隨身の色めく、色めく紙といひつぐ。

をも同日のこゝとして作れり。 **紙の四手** 紙にて作 **駒くらべ** 馬 **掛けてやさしく** 云駒を懸くことこの縁にて懸け並ぶる駒

りたる幣 **駒くらべ** 馬 **掛けてやさしく** 云駒を懸くことこの縁にて懸け並ぶる駒

りたる幣 **駒くらべ** 馬 **掛けてやさしく** 云駒を懸くことこの縁にて懸け並ぶる駒

に縁あるものうち、優に松風の上の云まづ松にかゝれる藤の花をいふ。尾上の花に云次に尾の

やさしきものをいひ列ぬ。僧正遍昭は云古今集序に「僧正遍昭は、歌のさまは得たれども、まことすく

かゝりて花の如く見ゆる白云。次云に心を動かすは浅はかなりし云の意を以て其遍昭の歌云。繫ぐ駒云前の糸より言ひかへて、古歌に「蜘蛛のい

「あさみどり糸よりかけて白雲を」云々の歌詞を引く。忍ぶ今宵の云手枕を承けて忍ぶと續く。今宵編と二人にて忍云。中々恨

みしは云さやうに二道かけながらも、懸路にては空情にも恨めしく思ひ、逢へば又夢の如くに枕を交すも

忍ぶ習なれど、今夜たまく詞をも交したることなれば、今は包ます言はん云に、われらこそ伊勢の二柱の神ぞと

なり。「中々」は却つての意の古語、二柱とは内宮外宮の二柱の神の謂にて天照大神と豊受大神とあるべきなれ

ど、こゝには日神(天照大神)月云疑ひ波の云疑ひなし、波の川、川竹、竹のよ、夜も明け。内外云内宮、

神(月讀命)二柱として作れり。雲は千里の云詩人玉屑の詩句に「千里好山雲乍飲、一樓明月雨。大棟梁云統べ治むる意に

天照大神以下、五代の神。「地神五代云和光利物云佛菩薩が本來の徳光を和けて衆生を利するため假に

の祖」と作れる「祖」を今「孫」と誤れり。裳濯川云伊勢神宮の境内を流るる五十鈴川の名。木綿四手云ゆふ(本綿)に

しを、八百萬の神々愁へ感ひ、窟戸の前に種々の飾りをなし、延爆(にはび)を焚き、神樂などせしに、大神少し窟

戸を開きて窺ひ給ひしかば、手力雄神やがて御手を取りて出し奉り、こゝに再び天下明かになれりといふ故事。

あらぶる神云あらく、青和幣、白和幣云共に幣帛。麻にて作れると、ゆふ(木綿)にて作れると。岩戸の

前云天香山の眞神を立て、「下枝懸青和幣」と書紀に見ゆ。

韓神云神樂の曲名。催馬樂云唐樂の譜に合せてつくりたる一種の樂曲。千早振云神樂の歌をうたひ

々「あはれ、あな面白、あな樂し、あなさやけ」と呼び給へりといふ故事。高天の原云天上にありといふ、神々のいます國土。天地云神のいます處。

装束附

前シテ (老翁)

面小牛尉、刷髮、襟淺黄、着附小格子、白大口、茶水衣、緞子腰帶、尉扇(挿)、繪馬(持)。

後シテ (天照大神)

面増、鬘、襟白二、着附白綾、緋大口、白單狩衣、縫入腰帶、扇。

ツレ (姥)

面姥、姥髮、無色鬘帶、襟朽葉、着附無色摺箔、無色唐織、淺黄縷水衣、繪馬(持)。

後ツレ (天鈿女命) 謠無し

面連面、黒垂、天冠、襟赤、着附摺箔、緋大口、紫長絹、縫入腰帶、扇。

後ツレ (手力雄命) 謠無し

面三日月、黒垂、透冠、襟紺、着附厚板、半切、法被、紋附腰帶、扇、榊枝四手つけ持つ。

ワキ(敎使)

大臣烏帽子、赤上頭掛、着附厚板、白大口、袷狩衣、縫紋腰帶、扇。

ワキツレ (從者二人)

大臣烏帽子、蒔上頭掛、着附厚板、白大口、赤袷狩衣、紋附腰帶、扇。

脇能

繪馬

節分

後ツレ 天細女命(諺ナシ)
同ツレ 手力雄命(諺ナシ)
ワシキテ 天照大神(前老翁)
救使

早次第上(確カニ流マズ)

(三人)ツヨク
(拍子合)

治りまゝに世を守り。治りまゝに
世を守り。伊勢の宮居まゝらん

早行(健カミ)

抑この大炊の帝は奉る。臣下あり。

侍も我が君伊勢大神宮を信ト給ひ。

數のは寶を捧げ給ひ。其敷を蒙り。

唯今伊勢系宮仕の(天キク)風ハよある

道行上(三人)
打切(拍子合)

繪馬

松本や風の上ある松本や。雲雀落ち
 来る粟津野の草の茂み分け越
 えて。瀬田の長橋打ち渡り野路條
 原の草枕夢も一夜の旅寝か夢
 も一夜の旅寝か夢。急ぎる程よ。
 こゝにはや勢州齋宮よ著きていふ
 夜半節分よ此處よ繪馬を掛くこと

ワキ行 (落着く確カリ)

不氣味 (鬼ノ目)

今夜ハ

神も

申の向。今宵ハ此處よ逗留。繪馬を
 掛くる者や見えやと存の。あられた
 まの春よ心や若草の神も久き惠
 如家。霞も雲も立つ春を。去来
 ちやいせん。年のくれ。それ馬を華
 山の野よ放ち。牛を桃林よ繋ぐ事。
 皆聖人の諺や。その賢き世の習。

ツテ入上 (位静)

真ノ一 (拍子不)

位ノ疾シテ

確カニサテリ

(アミン)

テ

皆

聖

習

千早ぶる神代
●小話

時より引かれて四方の海の濱の真砂
 を敷へても君が千年のある敷をたと
 へても猶ありがたや
 神代や聞けバ久方の天津日嗣の
 代とありて天津日嗣の代とありて
 人皇末代の子孫まであり一恵を
 受け継ぎて治まるは代のおれらまで

古本ニ

仰ぎ
トモアリ

及ぎぬ君を行ぎつ夜晝仕へ奉る
 夜晝仕へ奉る
 人ごも尋ぬぐも事もの
 事ものか何事ものぞ
 今夜ハ

此處は繪馬を掛く申の真の
 所んば即ちあれらが繪馬を掛けのよ
 そん何の謂は依つて掛けられぬぞ

シテ(静ニ唯カト)これの唯イフサイ一切衆生の愚シユオ妄グ無智チあるを

象カタドり馬の毛カウより明年シヨオキの日ヒを相ソクし。

又シノダ雨シノダ降シノダき年シノダをシノダもシノダ心シノダ得シノダべきシノダ為シノダめては

(拍子不念)

きシノダてシノダくシノダ今シノダ夜シノダいシノダつシノダあるシノダ繪馬シノダをシノダ掛シノダけ。

明年シノダの日シノダをシノダ相シノダしシノダ給シノダよシノダ誓シノダひシノダしシノダら

れシノダもシノダ等シノダしシノダけシノダれシノダもシノダまシノダづシノダ雨シノダ露シノダのシノダ恵シノダを

受シノダけシノダ。民シノダのシノダ心シノダもシノダ勇シノダみシノダあるシノダ。よシノダみシノダぢシノダのシノダ黒シノダの

繪馬シノダをシノダおシノダけシノダ。國シノダ土シノダ豊シノダよシノダみシノダさシノダくシノダれシノダあシノダらシノダう

暫シノダらくシノダばシノダ耕シノダ作シノダのシノダ道シノダのシノダ直シノダあシノダらシノダうシノダことシノダを。

神シノダ慮シノダもシノダ悦シノダびシノダ給シノダよシノダしシノダけシノダれシノダ。まシノダづシノダ此シノダ尉シノダが

繪馬シノダをシノダ掛シノダけシノダ。民シノダをシノダばシノダかシノダやシノダとシノダ思シノダひシノダら

しシノダやシノダりシノダのシノダ言シノダをシノダ宣シノダふシノダ。みシノダたシノダもシノダ更シノダよシノダあシノダらシノダう

まシノダ。カシノダやシノダもシノダひシノダらシノダうシノダてシノダ。天シノダ地シノダをシノダ動シノダかシノダし

目シノダのシノダ目シノダめシノダ鬼シノダ神シノダのシノダ猛シノダをシノダ心シノダをシノダ和シノダくシノダるシノダ。歌シノダの

ニハナニ

ハ雲をねらひて。天の雲のあはれ
あ。こしらふ。嫌。あ。か。か。

シテ何(角エタマヤウカンテ)

も互に辛き。隙行く駒の道行り。

かん上(氣ヲ束セテ確カリ)

いざやらの繪馬を掛けて。萬民樂む

せ。あ。さん。び。よ。さ。れ。た。り。此。程。ハ。

(漸次ニカソツテ)

つ。掛。け。た。ら。繪。馬。あ。れ。も。今。年。

始。め。て。こ。う。掛。け。て。雨。も。降。ら。ず。

ツレ(サフリ)

日。も。待。ち。て

シテ(確カリ)

人。民。快。樂。の。因。り。

ツレ(疾カリ)

地上(サフリト)

ぐ。み。を。か。け。ま。く。も。天。や。こ。れ。を。ぞ

(袖子倉)

頼。む。神。恒。に。繪。馬。の。掛。け。た。り。や。國。土

上敷(氣ヲ更ニテ明カリ)

豊。よ。あ。さ。り。よ。賀。茂。の。は。あ。れ。の

ひ。や。り。の。日。賀。茂。の。は。あ。れ。の。ひ。や。り

の。日。こ。れ。を。物。見。よ。は。隨。身。色。め。く。紙

の。四。年。つ。け。て。掛。け。あ。ら。べ。た。ら。駒。を。ら。べ

●クセ留マテ獨吟
此詩は、
マテ小説

かけてやさしく浦へは松風のよの
 藤は尾よの花よ咲き添へてまたあひ
 く白雪また掛けて色やまをあり
 僧心遍照の歌のさまへ得たれども誠
 少い壁へは繪よ畫ける遊女の姿よ
 めでむ徳よ心や動かさる浅緑京より
 かけて繋ぐ駒へ道掛けてあうく

恨みは心路のそら情逢よさ入夢
 の手枕忍ぶ今宵のあらをれて
 詞やあをを此上の何やら包むるあれ
 らん伊敷の二柱夫婦と現ドまら出
 づる信ぎべし信せし疑ひはの川竹の
 夜も明けゆかば内外めて待ちえてま
 めえ申さしと夜半のまをりて失せよ

けり夜半よまぎわて失せよけり
地上(暗トドワシリ)
 雲ハ萬里よ収まりて月讀の明神の
出端(註掛) 拍子不合
 は景の尊容を照し出でたまよ
(雄大ニ時々ト)
 われ日本秋津島の大頭領地神五
後シテ
 代の祖天照大神
地上(豊カニ地ニナク)
 裳濯川の和光利物は裳濯川の
打返返(ヤ)
 水と蹴まつる波の如し
打返返(ヤ)
 されども誓ハ

従来孫トアリ
 シラ祖ニ訂正
 ス

虚空よ満ち来る五色の雲も輝き
(シラニ) (拍子外ス)
 出づる日神のは姿ありがたや
(拍子合)
 齋宮の名よあり
地(前テ承ケテ流マズ)
 の名よあり神牆志とろよ本綿四
(拍子外ス)
 手のあらまよ神體あらまれ給よあり
(明カニ合)
 がたや
中ノ舞
 昔天の岩戸よ閉ぢ籠りて
地(前テ承ケテ粘ラズ)
 天の岩戸よ閉ぢ籠りて悪

神を憇しめ奉らんとして日月の
 影を隠し常闇の世のさそひつま
 てか荒ふる神とこれに歎きていふも
 は心するや神葉の青和帯白和帯
 色とさまぐよ歌よ神樂の韓神雀
 馬樂千早ふる天安神樂面白や拾子不命おもて
 白やと覺えも出るや拾子不命用いて感

神
 は

下へ給へどもいつまで出るや手力雄の
 尊ハ引き開け衣の袂よまがり拾子不命
 連れ現れ出で給ふ有様又珍しき神
 遊の面白かりしを思ひめ忘れども
 高天の原よ神とまつて天地之度
 開け活まり國土も豈皇よ日日の光の
 長閑けき春こそ久しけれ

給
 有
 様

春
 長
 閑
 け
 き
 春
 長
 閑
 け
 き
 春
 長
 閑
 け
 き
 春

現在七面

解題

日蓮上人法華經の功德によりて七面の池に住める龍女を成佛せしめしことを作れり。類似の曲七面に對してこれを現在七面といふ。古く今の身延を身延山と云ひし頃此曲の名を身延と云ひしが如し。

謠ひ方便概

身延などに似てそれよりは稍確りど、總じて釋教の心を本とす。

シテ

前は蛇身が女姿に装ひて成佛を乞ふものなれば、柔和に慇懃なるうちにもどことなく強みを帯びて確りど、然も懊惱の風情あるべきなり。次篇は重くならぬを程と少し抑へて出で、サシより稍さらりとになり、下歌、上歌に互りて力めて殊勝に渴仰の心を謠ひ表はすべし。問答はつゝまじやかに承け應へて位の重くならぬやう心す。ロンギの「ありがたの御事や」云々は静めに扱ひ、「今は何をか包むべき」はさらりと出で、「われは七面の」より確りとなり、漸次強みを含みて氣の變り行く處を大事に謠ふべし。後は菩薩の身となる喜びの心にて晴れやかに引き立て、扱ふ。「謹上」は確りと出で、ワカは朗かに暢びくくと「嬉しや」云々は乗つてさらりとあるべし。

ワキ

高僧の心を持ちて氣高く謠ふこと、猶身延のワキの如し。通じて聲調を高からず取り、シテを侵さざるを程として十分に位有るを宜しとす。

地

初の上歌はさらりめに附けて清らかに謠ひ、サシはさらりと、クセは通じて殊勝に扱ひ、運びの鈍らぬやう注意す。ロンギはさらりと承け渡して「夕風も烈しく」を隙さすに取り、「立つや黒雲の」より氣合を掛けて位を進め、強く凄く謠ひ込む。後の「あら不思議やな」云々はどつしりと乗つて大きく謠ひ、「瞻仰してこそ居たりけれ」を確りと止むべし。「其時上人」云々は氣を承けて出で、「忽ち蛇身を變じつゝ」と氣をかけて運び、返しより和げてさらりと、「音樂聞えて」と聞く心にて調子を聊か内へ取るべく、以下朗かに謠ひ行き、「ふり上げて聲すむや」と位を締む。「再拜」は確りと、「入りての後も」云々は承けて暢びやかに、キリは爽やかなる趣を得て謠ひ納むべし。

辭解

世尊 釋迦牟尼佛を指す。世に尊重せらるゝの義。佛十號の一なり。**五時八教** 五時八教とは天台智者大師が釋迦一代の説經を分類したる名稱にて、五時とは之を時

代的に區分したるもの、第一華嚴時、第二阿含時、第三方等時、第四般若時、第五法華涅槃時なり。八教とは化儀の四教、化法の四教をいふ。化儀の四教とは頓、漸、秘密、不足、とて釋迦教化の形式より分類したるものなり。配立しは配當して自己の宗義を立つるの謂なり。權實二教 權は一時の機宜に適する法、實はいへるは法華、權は 滅後の弘教 釋迦死後に於て 正像末 佛滅後教法の行はるゝ時期を三時に分ち其他のすべての教。 釋迦弘布の意 たる稱。初五百年間を正法時といひて、佛道を修業し佛果を證悟する者多き時なりとし、其次一千年間を像法時と云ひて、修行するものあれども、證悟する者少き時なりとし、更に其後一萬年間を末法時といひて、修行する者も證悟する者もなき時代なりとせらる。

後五百歲 大集經に佛滅後を五百年づゝ五期に分ち佛道修行に差降あることを説きたる最後の五百年。今其後五百歲の時なれば「時期に適ふ」と言へり。法華經勸發品に爾時普賢菩薩白佛言、世尊於後五百歲濁惡世中、其有受持是經典者、我當守護除其衰患令得安穩。 **妙經** 妙法蓮華經の略。 **身延の山** 甲斐國南巨摩郡身延山にあり。文永十波木井實長深く之に歸依し此山を寄附せしかば、日蓮公に草庵を結び隱棲し、弘安四年遂に一字を建て身延山久遠寺と號せり。今日蓮宗の總本山なり。 **寂莫無人** 法華經法師品に寂莫無人聲、讀誦此經典、我爾一心三觀。天台宗の觀法にて吾人の一心を空假中の三様に觀念することなし、時爲現清淨光明身より取る。 **一心三觀** 心は因縁生のものにて其所在を知る能はざれば實性空無なりと觀るを空觀といひ、空無なれども森羅萬象歷然として存することこれ盡く一心の現象なりと觀るを假觀といひ、實性空無なれども現象有り、されば空にあらざる有にあらざる即ち中なりと觀るを中觀といふ。 **第一義天** 第一義とは一切諸法の中第一の實義といふ意にて諸法實相に名けし美稱なり。前に謂はゆる一心三觀に「第一義天然之理」。以下 **懸河流瀉** 辨舌滔々として水の流るゝが如きをいふ。 **鷺のみ山** 釋迦の法天の縁にて月を喻に引く。 **八卷の法の花** 法の花は法華經の字を延べたるなり。八卷は法華經の卷數、以下、法の名者開闢山(原) 花、花のひも解き、時知る風、風に立ち渡る浮雲といひつきて、日蓮聖人

の歌「立渡る身の浮雲も晴れぬべしたえぬ御法の鷺の山風」、(身延山御書)を引き、風の **四明の洞** 支那の浮雲を拂ひて月影の玲瓏たるが如く法華の御法によりて迷妄の浮雲を去る意を綴る。 **我立つ杣** 比叡山を指す。傳教寧波府にあり。指要抄詳解に「慶元府南面山名、有峰最高、四六在上、每澄霽望之如戶隔、相傳謂石窓、謂四畔通日月星辰之光、故云四明」。 **貞享版** 諸本には「御山もいかで勝を建立せし時「阿耨多羅三藐三菩提の佛たち我立つ杣に冥加あらせたまへ」と詠せしに由る。身延山は支那の四明、我國の叡山にも劣らじとなり。 **眞享版** 諸本には「御山もいかで勝又大城云々と續く。元祿前後に省略したるなるべし「まづ東は天子が嶽、空につらなる青壁朝日をかけ、西は七面の峰、道をさしはさむ丹崖夕陽に映す、北には身延山、嶺そびへ松高うして上求菩提の心を示す、南は鷹取山谷めぐり水深うして **大城、波木井** 共に身延山 内の地名。 **隨緣眞如** 實大乘に於ては眞如に不變と隨緣とのれども更に隨緣の用ありて、外來の縁に隨つて森羅萬象を現すること譬へば不變の水、外縁の風に依て千波萬浪を起すが如しとなり。故に茲に「河風に、波の立ち居もおのづから隨緣眞如を現はす」といへり。 **谷の戸出づる** 谷の奥深く狭まりたる口の稱より轉じて廣く谷をいふ詞。 **法を唱ふる** 鶯の「法華經」來ても見よ 引歌かと思はるゝ、 **慧日の光** 慧日は佛智の能く世の迷妄を照すを日に譬へし詞。 **花より外は** 行尊の歌「もろどもにあはれと思へ山 かくあり難き」ふこと「かく遇ひ難き御法にあしなるべし。法華功德品に「言此經深妙、千萬劫難遇」とありてこれを引きたる平家物語 **盲龜の浮木** 人身に「人身は受け難く、佛敎には遇ひ難し」ともあり。芭蕉に「さも遇ひ難き御法を得」云々。 **優曇華** 佛説に譬とする想像上の花。靈瑞華と譯す。所の譬喩。涅槃經に「猶如大海中盲龜值浮木孔」。 **後世の闇** 後世の光明無からんをさす **松の戸** 戸いつの世を待つを松の戸に掛け **若有聞法者** 法華經方便

見在七面

る語。法華經を聞き信する者は如何なる者も必ず成佛するを得るの意。一二乘の聲聞乘、緣覺乘。下文闡提佛の正法を信せざる者をいふ。中

々の事 然りといふ。草木國土 土、悉皆御佛の成句を引く。久遠劫 釋迦は伽耶城に生れ、菩提樹下に成道し、靈鷲山に法

華經を説きたれども、實はもと極めて遠き久遠劫の昔既に成道したるものにて、法華經は其過去世の成道の時

悟り得たるものなりとなり。法華經毒量品に釋迦自ら「我實成佛已來、無量無邊百千萬億那由他劫」と説けり。

久遠劫とは遠く久しき。▲「妙法華經なり」の後、貞享本には次の章あり。「三世の諸佛の必要の藏なれば、我

昔の意。無限の長時間。等如きの凡夫に、説き聞かせ導かんとし給へども、衆生の機縁熟せざれば、説きい

ふことも更に無し。以下「然華嚴の朝 教前に所謂五時の中、第五の法華のみ釋迦出世の本懐を説きし眞實

に華嚴の」云々に續く。抑止在懷 釋迦は前の四時に於ても一乘眞實の教を説かん意切なりしも、時機未だ至らざりければ、止む

説かざりしとなり。一乗とは一佛乘の略にて何人にも十界差別 十界とは地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天

有情を此十界に分類該攝したる稱なり。法華にては十界皆成して此十界のものすべて成佛することを得と説け

ども、法華已前の經にては菩薩界の外皆自界に止まらざるを得ざるが故に十界差別まらちなりとなり。

女人は 外面如菩薩、内心如夜叉の語は或は華嚴經に、或は寶積經に、或は唯識論に出づといへども、

面は菩薩の柔和なるが如きも内心は陸奥の 女人に關する前の如き語の經文に満ちてあるを陸奥にいひ

夜叉鬼神の如く凶惡なりとの意。陸奥の 掛け、前の夜叉を受けて、和歌に女を鬼といひし例を擧ぐ、

大和物語に、平兼盛が陸奥にて、黒塚といふ處に住みし女のもとに、お荒れたる宿 同じく女を鬼と

くりし歌に、「みちのくの安達が原の黒塚に鬼もれりといふは誠か」。荒れたる宿 詠みたる歌「葎生

ひて荒れたる宿のうれたきは假にも鬼のすだくなりけり」といふが、伊勢物語にあ松山や 云いつの時をま

り。それらを承けて「よみしも女の事とかや」といふ。うれたきはいやらしの意。

山に掛け、古今集の歌「君をおきてあだし心をわ悔の八千度 古今集の歌「さきたぬ悔の八千度悲きは

がもたば末の松山波も越えなん」に辭を借る。▲ 貞享本には、「恨めしどのみ歎けども」として文を切らす次の章に續けり。「眞を説かん時至らねば徒に、人

に迷の浮雲に、邪正一如の月影も、雲隠れして現れず、げにも悟の道遠く、思ひをかぐる葛城や、高間の山

の嶺の雲、四十餘年の年波は、苦みの海に漂ひて、よるべも知らぬ人の身の、行く末はたゞ蘆の葉の、姿は舟に

似たれども、難波の人も渡らぬに、又一乗の波し舟、乗り得ぬことを悲しき。以下「然るに此法華經は」に續く。

佛七十餘歳 天台宗の所傳にては法華經は釋迦七十二 一味の法の雨 法華經藥草喻品に「其雲所

分受潤、また佛平等説、敗種の二乗 法華以前に於て、聲聞緣覺の二乗は小乗の悟に満足し、永不成佛

如一味雨」などあり。敗種の二乗 とて佛と成るを得ざるものと信じ居たるを以て、腐敗せし種子の

芽を生ぜざるに喩へて敗種の二乗といへ。文殊の教 法華經提婆品に、文殊菩薩の教化により八歳の龍女

り。維摩經に「於此大乘己如敗種」。文殊の教 法華經提婆品に、文殊菩薩の教化により八歳の龍女

々とは本覺眞如の本體に還るの意にて成佛したるをいふなり。錦 妙典 法華經を指す。以下、その理を説くを

を衣て故郷に歸るの古語あれば故郷を承けて錦の袂といへり。妙典 法華經を指す。以下、その理を説くを

一すちと 三熱 龍蛇に三熱の苦あること 七面の池 身延山の西に七面山といふ高嶺あり。日蓮の身延を開

山神を七面明神といふ。七面の池は其山頂にあり。以 瞻仰 仰き 於須臾頃 法華經提婆品の龍女成佛

下、池に住む、澄む月並といひ通はず、月並は年月の意。瞻仰 仰き 於須臾頃 法華經提婆品の龍女成佛

品を讀み上げたるなり。舊 如我等無異 法華經方便品に出づる語。我が如 四種の花 曼陀羅華、摩訶

本「頂」を「頂」に作るは誤。如我等無異 法華經方便品に出づる語。我が如 四種の花 曼陀羅華、摩訶

の白蓮華、曼殊沙華、摩訶曼殊沙華 宜禰が鼓 虛空より聞え來る音楽は神主 報謝の舞 女體の神が

(小大の赤蓮華)。法華六瑞中の一。宜禰が鼓 虚空より聞え來る音楽は神主 報謝の舞 女體の神が

樂を奏す。鈴の音 神樂の舞に用 月も霜も 白和幣に掛く。鷲の山 續古今集に出でたる顯昭の

見五七二

三

三身圓滿 法報應の三身、法身は真如の本體、報身は真如の理を證悟し感得する所の色身。應身は衆生に隨應して種々變化示現する所の化身をいふ。圓滿は具足の意。 **和光同塵結** 縁 佛が本地の光を和けて世俗の塵埃に應同し種々の姿を現はすを。 **垂迹示現** 足迹を垂るゝ義にて、佛がいふ詞。止觀に「和光同塵、結縁之初」とあるを引きて語を轉す。 **垂迹示現** 本地より假に此世界の現はるをいふ。 **七福即生** あるまじき詞なり。いづれかの語の誤傳なるべし。追て考ふべし。

装束附

前シテ (女)

面深井、鬘、鬘帶、襟淺黃、着附摺箔、唐織壺折、縫箔腰卷、扇。

後シテ (龍女)

面般若、白頭(黒垂下に着け込む)、大龍戴、襟白二、着附鱗箔、紫大口、法被、腰帶、扇、打杖

物着にて装束變り、面増、天冠(立物月輪)黒垂、着附箔、大口(同前)舞衣、幣持つ。

ワキ (日蓮聖人)

花帽子、白綾、込大口、差貫、紫水衣、掛絡、水晶珠數、經、扇。

ワキツレ (從僧二人)

角帽子、着附無地熨斗目、白大口、縷水衣、腰帶、扇、珠數。

四番目
又五番目
畧脇能

現在七面

無季

ワキテ 龍女(前ハ里女)
日蓮上人

ワキツレ (狂言回向)
ツヨク (拍子下合)

引の世尊の教法ハ五時ハ教ノ配立シ。
権實ノ教ノ分テリ。さら程ノ滅後の
引經もハ像末ノ次第トシテ。今後五百
歳の時ハバ時機ノ適ヨ此妙經を
弘メテ。國土安全ノ勸ヲあせし。その
甲斐の身延の山ヨテま籠リ。寂寞

現在七面

無人の樞の内より

無人の樞の内より讀誦此經の聲絶
えぎ。心三觀の窓の前より第一義天
の月まはるあり(地上歌) 尾よの風の音ま
でも。尾よの風の音までも。皆法の聲
あらまや。おち瀧つ瀬の響音も唯懸河
流瀉のほ聲よて。就鳥のほ山も餘所
あらまや。巻の法の花の紐時知る風よ

羊行(落著)

まろ渡の身の浮き雲も晴れぬれば心
の月ぞさやあつたの月ぞさやあつた
われは法華修行の身あれば。讀誦禮讚
や。意の事あまの所よ。づくもあまの女性
の絶えも言てる。今日も亦来りていさむ。
名を尋ねざやと思ひは(大キク) 法の教を
身よ受けて。法の教を身よ受けて誠の

誠の道よ

見せし書

道よのまらよ(拍子不合)あつがたの霊地やあ。
 漢土よの四明の洞和朝よの我がまら
 松と詠けりん。山もいそでまらまら。
 きて又大白は本井の何風よ。はのまら
 居もおのつから。随縁真如や。見せり
 谷の谷出つる鷺鳥も。法を唱る花の枝
 来ても見よ。身延の山の深雪だよ。身

●小謡
来ても見よ

下歌(寛)タリト
カテ
(拍子合)
上歌(物寂)ビテ、シツカリト

地拍子
思ふ心

延の山の深雪だよ。春をゆきて消えぬ
 れ。これも慧日の光やと思へ。我がつく
 りの罪科も。かくこそ消えぬ頼も
 や。信ぶ心やまら。まらあつがたま。
 山あまら。まらあつがたま。山あまら。
 怪やあまら。山あまら。外へ知る人も
 あり。身あまら。まらあつがたま。

ワヤ付(穩カ)

法經讀誦のやうくよ歩をばこび
 花水や佛よ捧げ給よ。さておこいこら
 あり入るてまゝまきぞ シテ(換マシヤカニ)
 りよ信む者あるが。あつがたき法
 よ達し事。盲者の浮木優曇華の花
 待ち得たる心ちして。悦びの涙の露。
かん中(殊勝ニ)
 ちるちりしも縁を結び後の世の園を
(拍子不合)

晴さむら。又らの世を松の戸の明暮
 あゆみや運びつ ハ。オ。ト 上人よ結縁を
ウイヲハナ ワキ上(穩カニサラリ)
 せありあり。げよ奇特ある信心也。
 此法華經を保ちぬれば。若有聞法者。
 無一不成佛と説き給ひて。二乘園提
 悪人女 ア。ニ。ン。ニ。ン おあめて。成佛する事疑ひ
(聞) 雅ニカウテ)
 あり シテ 諸のこころありがたや 地上秋(清ラカニサラリ) 其名
(拍子合)

だもまだ聞ぬ其名だもまだ
 聞ぬは法に既に保つまでい
 結びけんげ頼もきなりけり
 も女の佛とある謂や示しお
 ありの事古日本國土悉皆成佛の
 法華經あるが女の助かりたる所
 も語つて聞かせんべし

半行(後カニ確カリ)

地クリ上(朗カニ暢ビク)
 ツヨク(指子不念)

●サシクセ獨吟

華經といつて釋尊久遠劫の昔
 初成道の時悟り得給ひし妙法華
 經あり然るは華嚴の朝あり
 般若のつべよ至るまで
 志給ひて種々の方便機を隨ひ終よ
 乘を説き給ふねハ十界差別まろく
 あり

現在七面

五

よ似て。内なる夜叉の如く。と嫌われし。
其言の葉はもろくの徑の内り陸。
奥の安達が原の黒塚や。蒸れたる宿
のうれなきよ。假も鬼のまたくあると。
誦文も女の事とあや。あら身なき身
の浮まゝの事らつ時の時をか。松山や。袖よ
侯の浪越えて。作り重ね。罪科を。

悔の八千度身ながら。さう。佛の法は。法の
言の葉さへ。恨め。とのみ歎きけり。
然らば。此法華經の。佛七十餘歳まで。
姑めて。説かせ給ひ。よ。そよ。や。一味の法
の雨等しく。戯ぐ。潤ひ。よ。取種の。不棄
濁提も。皆と。同。悟を得。殊よ。文殊の
教まで。龍女の須臾。よ。法をえて。此世を

思ふ

六

からの身を捨てどももとの悟の古里よ。
 立ち帰る有様や。錦の袂あるらん。
（健カニサフリ）
ヨウク 此妙曲の理を。とく唐糸の一條は行き
 て保ち給へや。ありがたのし事や。
 さしてあらずも隔あきは法の水や手よ
 掛ひ絶えむ苦も三執の焔を早く
地上（地ニヤク） 免れん。そも三執の苦みや免れん

地相子
 神
 われ七面の池よ

べーと宣よ。そては身ハ靈神の假よ
（新次ミ） 女ありたるや。今ハ何や。色むべき。
（氣ヲ更ヘテ確カリト） われハ七面の池よ。むむ月並の敷知
ナナオモテ らぬ。年経たる蛇身あり。おらハ識
（物邊デニ確カリト） 悔の其為よ。もとの姿を見せ給へ
（前ア承テテ障サズ） 取也。あがら報恩よ。あり。姿を見さ
（氣合ヲカケテ物邊ク進ム） んと。外風も烈く。立つや。黒雲の

中へも早き雨の足踏又車轉り鳴
 神の稲光と冷まれば音もあはれ
 失せよけり音もまぎれて失せよけり
 かる不思議な事も唯これ法の力ぞと心を
 ままひたふるよ讀誦やあして待
 ち居たり讀誦やあして待ち居たり

切迫 待誦
 早上歌
 殊勝ニ滞リナク
 (拍子合)

他上 (靜ニドツシット)
 (拍子合ノ凡)
 出端又ハ早音
 (後シテ出)
 打上打送
 (ヤヤ)

あら不思議や今までかあら不思議
 や今までか妙は優ある女と見え
 つらさも冷まれば大蛇とあつて日月
 の如くある眼や閉きよ入の高座を幾
 重もあぐくくともき纏ひ慙愧
 懺悔の姿を現し高座入頭や上
 げて瞻行してこそ居たりけれ其時

高座
 冷まれば大蛇
 大蛇と
 (ヤヤ)

上げて瞻行
 (ヤヤ)

見仕て面

×半打込一拍子ニ
テ、其頭ヘカケテ
謡ト出ス。又半打ニ
半打込頭打
切ニモ。

三人は経を取り上げ、其時上人は
経を取り上げ、於須臾頃便成心覺すと。
高らかに唱へ給へば、忽ち蛇身も變下
つ。忽ち蛇身變下つ。如我等無
異の身とあれは、室よ此系雲たあびき。
四種の花あり。虚空よ音楽聞えきて。
まねが鼓またぐもある。報謝の舞の袂も。

異香薫として吹き送る。松の風飄々の
鈴の音も更け行く。夜半の月も霜も
白和帯。あり上げて聲をむや。謹上
再拜。就馬の山いよまきみける。月
あれば。のりての後も。世を眠きらん
嬉しや。妙经信受の功カ。三身圓滿の妙體
妙经信受の功カ。三身圓滿の妙體

●獨吟
仕舞

シテ中(奥カニサラリト)
ヨク(拍子合)
ヨク(拍子合)

地上

再拜

神樂

就馬

地上

嬉しや

見立

和光同塵

ちを受け。和光同塵結縁の婆をあら
 ち垂跡示現して。此山の鎮守とあ
 して。父難水難もろくの難や除き。
 七福則生の願を満て。め代と重
 わて衆生を廣く濟度せんと。約諾固
 く申しつ。ゆくも白雲よまを紛れて。
 虚室よよらせ給ひけり。

昭君

解題

別名王昭君。王昭君胡國に遣られたる後、形見の柳の枯れたりを見て、父母其死を知り、悲しさの
 餘り其面影を見んとて故事に慣ひ鏡を立てしに、昭君の亡靈、呼韓邪單于の亡靈と共に鏡に影を映
 せることを作れり。世子六十以後申樂談儀、禰風習道目錄等に記録見ゆ。歌舞髓腦記には王昭君とあり。能本
 作者註文に世阿彌作としたれども、他書に據るところ無し。粟田口猿樂記に永正二年四月十四日其勸進猿樂の
 二日目に演せられしこと見え、申樂談儀の後人の加筆の中に永正十一年十月廿八日南都雨喜びの能(當日十
 七番)に演せられしこと見えたり。天和版及び元祿版諸本に比ぶるに現今のものは辭句所々に出入あり。

能之小書

舞働あり。

謠ひ方梗概

略脇能にも用ふる曲なれば、總じて沈滞無きを旨とすべ
 きも前半は其文に従ひて悲愁の味はひあるを宜しとす。

シテ

前は天鼓に酷似したり。我が子を思ひ盡して形見の木蔭に低回する老父の哀なる心中を表すに力むべ
 し。此心にて出の一聲は抑へてしつとりと扱ふ。尤も三四番目物などにあらざれば心に強みを持つ方
 好し。サシよりは稍さらりと取り、下歌にて更へてしめやかに。上歌は改めて静に出で、寂しげなる様に謠ふ。
 ツレとの掛合は氣を勵ます體にて順次少しづつかゝつて承け渡す。次第の連吟は別に位を定めて静に寛りとあ
 るべし。ワキとの問答は初の如くに抑へず。徐々に位を進め「此柳を植え置き」の一句を特に心して確りと言ふ。
 クリは少しく上に取りて確りと謠ひ、サシにてさらりと扱ふ。クセの上端は引き立て、大きく、ツレとの掛合
 は氣を乗せて弛み無かるべし。後は夷の大將の靈なれば前と全然趣を更へて豪宕を旨とすべく、「これは胡國の」
 云々と剛健に謠ひ、ツレとの掛合又力ありてごつしりと、「いでいで」以下は十分に氣をかけ、地との掛合強々
 と弛み無か
 るべし。

ツレ

老嫗なれば餘り調子を高めざるが宜しけれど、獨謠ふ處は稍
 さらりとあるべく、シテと連吟の處は總べてシテに従ふ。

子方(昭君) 子役なればさらりとあるが宜し。「春の夜の」云々は一聲の調子にて暢びやかに謠ふ。

ワキ 確りめにはきくどあるべし。

地 初の「落葉の積る」云々は前の次第を低音にて繰り返すなれば、承けてさらりめに、上歌は派手にならぬはさらりと、クセは音を引き締めて確りめに出で、「さもあらで」の邊を締めて確りと謠ふ。クリはシテを承け、サシ「と聊か鎮め、其後を前へ戻し、「力なくして」以下確りと止む。「散りかゝる花や」云々は少し氣をかけて附け、「もしも」より心持を更へて稍ゆつたりと謠ふ。後の「曇りながらも」云々は昭君を承けて出づ。シテとの掛合は大乗りにて抜けぬやう弛みなく扱ひ、「鏡に寄り添ひ」より位を進ましむ。キリは乗り地を離れ、前よりはさらりめに謠ひ納むべし。

辭解 唐土 昔、時代に拘らず支那を呼びし稱。かうほの里 字不明。恐らくは據るところ無き假作の地名なるべし。王昭君の故郷は漢書には南郡秭歸、樂府原題等には齊國とのみ。白桃王母 樂府原題に「嬌(昭君の名なり)、齊國王種女」、琴操に「王昭君前漢書には「王昭君者齊國王種女也」とあれば、之も謠曲作者の假作の名なり。昭君 前漢書には「昭君字昭君」。後漢書には「昭君字嬀」とあり。後漢書に、昭君漢元帝の宮女とあり、數年を経たるも帝に見ゆることを得ずして悲み怨み居たりしに、たま〜入朝の呼韓邪單于に宮女五人を賜ふ事あり、昭君掖庭に請うて呼韓邪に行く事をゆるされ、辭して去るに臨みて、帝其美なるを見て大に驚き、心中これを留めんと思ひしも、信を失はんことを恐れて遂に匈奴に與へたり。後昭君二子を生む、呼韓邪の死後其前妻の子代り立つて之を妻とせんとしたれば、漢に上書して歸らんことを願ひたれど、成帝胡國の俗に従はしめしかば、遂に復後單于の妻となりたる事見えたり。この事柄を西京雜記には元帝後宮の宮女多くして一人一人見ゆるを得ざれば畫工毛延壽に命じて其姿を畫かしめそれによりて召し給ひければいづれも繪師に賂して美しく畫かしめたるに獨王昭君は其事をなさざりしため遂に帝に見ゆるを得ざりしに、後匈奴入朝して美人を求めたる時、帝畫圖によりて最も醜き昭君を撰み

給ふ、やがてこれを召し出し見給へば、其容貌後宮第一なりしかば、これを悔い惜みたれど外國に信を失はんことをおそれて、やむを得ず匈奴に與へ給へりと載せ、國書にては今昔物語、俊頼無名抄、唐物語等皆これに従ひ、圖畫せしめしを胡國の王より美人を求められし後の事とし、昭君胡國に至りて後、帝惜み悲みて戀ひ慕ひ給ひし由に記せり。唐書樂志、古今樂線等に之を樂曲に作られたる由を記せるが、其曲は古く我國に傳はりて、倭名類聚抄に「性調曲、王昭君、無舞」など記され。胡國 匈奴。北狄の一族。今の内外蒙古の地なり。今昔物語、たり。本曲はこれらに基きて作りたるものなり。胡國 會我物語には胡國と記し、俊頼無名抄、唐物語にはえびすの國と記せり。秦漢時代に國 散りかゝる 拾遺集の歌「櫻散る木の下風は寒からで空にしられぬ雪勢盛なりしこと漢書等に見ゆ。散りかゝる ぞ降りける」を更へて出し、昭君の身を散らんとする花に喩ふ。明妃 古今樂線に「王明君、本名昭君、以觸文帝諱故。いみじき 勝れ 前世の宿縁 過去の世に因縁 漢宮萬里の 句「胡角一聲霜後夢、漢宮萬里月前船」を引く。供奉の官人 今昔物語に「彼昭君を給はりて、喜んで琵琶を弾き、諸の樂を調てぞ將て行きける」とあり。馬上に琵琶を 石崇王昭君供奉は御供。絃管は音樂の總名。絃は琴、琵琶などの類。管は笙笛などの類。馬上に琵琶を 君辭(古今樂線にも)「昔公主嫁烏孫、令琵琶馬上作樂、以慰其道路也、思其送明君亦必 眉毛を美しからしめ爾也」などあるを、こゝには此時より始まりと作れり。謠曲作者慣用の筆法なり。黛 眉毛を美しからしめを刺り別に畫 緑の色に 黛を柳の緑にてよそへて云ふ。白氏文集よりとりて和漢朗 春や緑らんきたる作り眉 詠集に載せたる題「峽中石上詩句に昭君村柳翠於眉」。春や緑らん 糸の縁語繰るに暮るを通はせ、糸柳の亂るゝを心の亂るゝにかけていふ。以下柳の事を云へるは俊頼無名抄(今昔物語にも)の昭君の事を記せる條に「みかごも戀しさにおぼしむづらひて、かの王昭君の居たりける所を御覽じければ、春は柳風になびき(中略)秋は木の葉庭につもり、風もろとも に 風と共に木蔭の塵 箒を(中略)物あはれなることかぎりなし」とあるによるなるべし。風もろとも に 風と共に木蔭の塵 箒を 天和版、元祿版諸本皆「箒おつとりもち王母おそしと待ち居たり」とあり。さゝがに 箒は意にて蜘蛛の一名。あり。寶生流も亦同じ。現今の如く更へたるは元祿以後のことなり。

さゝがに 蜘蛛は意にて蜘蛛の一名。あり。寶生流も亦同じ。現今の如く更へたるは元祿以後のことなり。

はいとに續けて云 風結ぶ 袖の玉玉の襟の露の玉の意を以て、たゞ世の常の 見ては普通の賤
ひ慣はしたり。 風結ぶ 袖の玉玉の襟の露の玉の意を以て、たゞ世の常の 見ては普通の賤
しき男と人は思ひ見るらんとなり。元祿以前の 昔の春 新後撰集の歌「あはれにも昔の春のおもかげを身
諸本及び寶生本には「たゞ世の常の庭はきさ」と。 昔の春 新後撰集の歌「あはれにも昔の春のおもかげを身
日は山の端に 山の端に入り、入相の鐘、かねて知らずる云 塵の身 濁世にある身の意。 拂ひ
もあへる 塵を拂ふと露を 風に散り 元祿以前の諸本及び寶生本共に「風におち水には浮ぶ花紅葉」。

る月に、また小篠の上の玉霰に喩へ、轉じて昭君の方より音便の無きを飾りていふ。音もさだかに聞えずとは、
老人の心の屈して霞の音をも聞き得ぬに寄せ、昭君の如何になりしか、しかとしたるたよりの無き意をいひか
けた。 御とむらひ 御見 天下を治めし始なり 呼韓邪の兄子支單于、漢に亡されし時、呼韓邪、
となり、永く漢と親を結ばんことを乞ひしかば、元帝王昭君を賜ひしなれども、今昔物語には、漢家胡國の王
の入朝を驚き騒ぎ、美人を賂して天下の安きを得んとしたるやうに記せり。いづれにしても王昭君の胡國に行
きしことにより國交を治 漢王 元帝を 宣旨 天皇のおほせといふ。 三千人の寵愛 唐物語に「三千人
めしなればかく作る。 程の意に解すべし。

王昭君と聞ゆる人なん、花やかなることは誰にも勝れ給へりける云々とある。 好色高位の姿 或は「紅色紅
るに基き、長恨歌の「後宮佳麗三千人、三千寵愛在一身」の句を借り用ふ。 好色高位の姿 或は「紅色紅
前後の關係により、花やかに美し。 賢聖の障子 我朝にて、古へ紫宸殿に支那三代より唐までの賢聖の像を
く氣高き姿の意なること明なり。 賢聖の障子 書し、賢聖の障子と稱したるを直に支那の故事の如くに扱
ひ、賢聖の障子に似せ、似せ畫と云ひ次ぎた 中に劣れる 今昔物語に、胡國入朝の時、大臣の奏したる
り。似せ畫は實際の形に似せて畫きたる畫。 中に劣れる 今昔物語に、胡國入朝の時、大臣の奏したる
んを一人彼の胡國の者 綸言 天皇の御禮詞。記に「王 語らひ 説きて引 御約束 宮女達と繪 柳髮風
に賜ふ可きなり」云々。 言如し綸其出如し綽。

に 云美しき姿を形容していふ。たをやか 覚え それを頼める 今昔物語に「王昭君は我が形の
は今俗にしなやかといふに同じ。 覚え それを頼める 今昔物語に「王昭君は我が形の
ざりければ」云々。又「これ形を憑みて繪師に財を與へざる故なりとぞ其時の人誇りけるとなん」。俊頼無名抄に
「王昭君といふ人の、形のすぐれてめでたかりけるを頼みにて、繪師に物をも志さず、打ちまかせてかゝせけれ
ば」云々。これを帝の寵愛の爲 打ち解けて 心にかげすにう 君子に私の 史記に「史佚曰、天子無
どしたるは作者の技巧なり。 打ち解けて 心にかげすにう 君子に私の 史記に「史佚曰、天子無
子には戲の言なし。 桃葉 此故事典據不明。以下、しんやう、とけつ、共に鏡の故事として引かれたれど出典
ど見えたるを引く。 桃葉 此故事典據不明。以下、しんやう、とけつ、共に鏡の故事として引かれたれど出典
ぬ人の心こそ誠を寫す鏡なれ」と結びたるは、唐物語の昭君の條に「うき世ぞどかつは知るはかなくも鏡の
影をたのみけるかな」といふ歌を載せ、更に章の終に「愛の涙乾く間もなし。此人は鏡の影の曇無きをのみ頼み
て、人に心のにこれるを知らず」と筆を、いささせ給へ 俗語にて「さあ、なさ ます鏡 明な 年を経
止めたるに思ひつきたるなるべきか。 いささせ給へ 俗語にて「さあ、なさ ます鏡 明な 年を経

て 以下古今集の伊勢の歌。原歌下の句「散りかゝるをや曇るといふらん」。原歌の意は、年久しく常に明鏡
の如くにて花の影を映せる水は、その花の散りかゝる時を曇るといふならんとなり。その曇るといふ語
を物思に心に曇ることに取りなして次句に續け、 鏡に向つて 天和本、元祿本、共に「あむとんに向
曇りゆく思のいよく増すをます鏡にいひかく。 鏡に向つて 天和本、元祿本、共に「あむとんに向
毛もよだつ 驚き怖れて全身の毛の立 呼韓邪單于 匈奴の主の名。古版本 冥途の鬼 冥途には地
を呵責する獄卒をさしていふ。冥途は よしなかりける 反りてその事の無かりしを喜ぶ場 氣疎さ
佛教にて死人の魂の行くといふ地。 よしなかりける 反りてその事の無かりしを喜ぶ場 氣疎さ
おそろしく 荊棘を戴く髪 亂れたる髪を云ひ慣はしたる語。 主を離れて 云その主の身體に添
厭はしき。 荊棘を戴く髪 亂れたる髪を云ひ慣はしたる語。 主を離れて 云その主の身體に添
様を 元結更に 元結にて結ふ位にては保ちおふせ され葛 蔓莖を有する 鎖 胡國の風俗な 其身
いふ 元結更に 元結にて結ふ位にては保ちおふせ され葛 蔓莖を有する 鎖 胡國の風俗な 其身

三

かあらぬか、我身なるか、又は他のものなるか、思ひ惑ふ心なり。「我ならば」たゞ君の云たゞ昭君の姿
 まゝに映れ、罪をあらはす云此鏡にさへ人は鬼の如く映り、一人はもこのまゝにて映れるを見れば、彼
 りとなり。淨玻璃鏡は地獄の閻魔の廳にありて、亡者の生前の善惡の所業を其儘映し出だすにせらるゝ鏡。今呼韓邪
 の影を鬼と映れりとし、昭君の影を昔のまゝなりとなせるは、支那古代の排外思想と昭君が身を以て世の平定
 に代へたる美事の賞讃 花かと思えて云昭君の姿の花かと思ゆる由をいひ、花を曇と見立てたる歌文多
 きを表したるなり。曇より曇る日といひつぎ、更に新勅撰集の歌「日かげさす少女
 の姿みてしより上の空なる物をこそ思へ」、續古今集の歌「夕暮のなからましかば白雲のうはの空なる物はおも
 はじ」などを心におきて文を飾り、これらも唯鏡上に見えたるほのかなる影に過ぎざるを、「ほのかに見」の音
 を承け、また前句の空の語に縁あらしめて三日月に喩へ。月の曇らぬ、曇
 らぬ人の心といひつぐ。うはの空とは心の落ちつかぬ様にいふ詞なり。

装束附

前シテ (尉、白桃) 面阿古父尉、尉髪、襟淺黄、着附小格子、茶水衣、緞子腰帶、扇(挿)、帯(持)。
 後シテ (呼韓邪單于) 面小癩見、黒頭、唐冠、黒鉢卷、襟紺、着附厚板、半切、法被、紋附腰帶。修羅扇。
 ツレ (姥、王母) 面姥、姥鬘、無色鬘帶、襟朽葉色、着附摺箔、淺黄縷水衣、無色唐織着流、帯(持)。
 後ツレ (昭君) 天冠、色鉢卷、襟赤、白着摺箔、緋大口、紫長絹、扇。唐織壺折にも。
 ワキ (里人) 着附厚板、白大口、側次、腰帶、扇。

五番目
 畧脇能
 畧四番目

眼 君

十月
 後ツレ 昭君幽霊
 ツレ 王母(姥)
 前シテ 白桃(尉) 後シテ 單于幽霊
 ワキ 里人

唐土あつほの里よはまひらきさる者
 ちてふ。ちてふも此處よ白桃と母と申を
 夫婦のゆり。一人の息女を持つ。其名を
 昭君と名づく。帝よ召さるては寵愛
 限あがり。所よ。心子細あつて胡國へ
 移さる。夫婦の人の歎た。世の常

昭君

ちらぎ^{○キン}の事^{ジヨ}をしてい^ヨる。ま[○]ち[○]越え
 訪^{トムラ}さ[○]や[○]と[○]思[○]ひ[○]ひ[○]の[○]散[○]り[○]か[○]ら[○]の[○]花[○]の[○]
(大キク)
ツシメスセイン上(位ヲ抑ヘテシットリト)
ヨウク(袖子不念)
 本^コ蔭^カの[○]ま[○]を[○]寄[○]り[○]が[○]空[○]の[○]知[○]ら[○]ぬ[○]雪[○]
穩カニサラリ
 そ[○]降[○]る[○]の[○]塵[○]土[○]か[○]う[○]ほ[○]の[○]里[○]よ
(アミナレ)
二人(シテアミ和シテ)
 住[○]ま[○]ひ[○]き[○]る[○]。白[○]桃[○]母[○]と[○]申[○]を[○]夫[○]婦[○]の[○]
二人(シテアミ和シテ)
シテヨリ(整メニサラリ)
 者[○]よ[○]そ[○]い[○]あ[○]り[○]あ[○]ほ[○]ら[○]の[○]賤[○]き[○]身[○]
 あ[○]ら[○]も[○]美[○]の[○]あ[○]ら[○]も[○]息[○]女[○]あ[○]り[○]

二人(シテアミ和シテ滞リナク)

眼[○]君[○]と[○]わ[○]れ[○]と[○]名[○]づ[○]け[○]つ[○]。容[○]顔[○]人[○]よ[○]勝[○]れ[○]
二人(シテアミ和シテ滞リナク)
 た[○]ら[○]さ[○]ら[○]が[○]帝[○]都[○]よ[○]名[○]な[○]わ[○]て[○]後[○]明[○]妃[○]と[○]
 其[○]名[○]を[○]改[○]め[○]て[○]天[○]子[○]の[○]女[○]と[○]お[○]な[○]す[○]ま[○]ま[○]
(静ニ寂シク)
 お[○]ほ[○]ら[○]の[○]身[○]あ[○]ら[○]も[○]猶[○]も[○]前[○]世[○]の[○]
シテ上
 宿[○]縁[○]離[○]れ[○]や[○]ら[○]ら[○]あ[○]や[○]ら[○]ん[○]諸[○]人[○]の[○]
 中[○]よ[○]選[○]ば[○]ら[○]れ[○]て[○]胡[○]國[○]の[○]民[○]と[○]な[○]り[○]漢[○]宮[○]
 萬[○]里[○]の[○]外[○]の[○]一[○]て[○]見[○]馴[○]れ[○]ぬ[○]か[○]た[○]の[○]旅[○]

の空。思ひや。こを悲。げれ。 (中)
 ども供奉の官人。ども。旅行の道の慰。
 め。よ。弦管の敷を奏。つ。馬。 (拍子合)
 琴を弾く事。も。此時。より。と。聞。く。もの。を。
 下歌中 (湿ヤカシ) カヘテ 畫圖。より。う。つ。せ。る。面。影。も。今。こ。そ。思。ひ。
 下歌ヨリ地ニテモ
 知られた。れ。 上歌 (節ニ類シク) かの。昭君の。儀。 ハカシ
 昭君の。儀。 緑の色。よ。白。ひ。も。春。や。
打切

●小 謠

葉。ら。ん。京。柳。の。思。ひ。 フラスク
 風。も。ろ。も。よ。ま。ち。より。て。木。蔭。の。塵。を。
 拂。さ。ん。木。蔭。の。塵。を。拂。さ。ん。 粘ラズ
 い。さ。庭。を。青。め。し。と。老。夫。の。帯。 前ヨリサナリ
 た。り。 スケト
 さ。が。よ。の。こ。と。昔。も。思。入。る。も。風。結。ぶ。
 涙。の。袖。の。よ。だ。お。か。れ。 目ヤロ
 ぬ。も。ふ。数。あり。
引立テ

ふだせきに
て

た。世の常の賤の男と。人もや見さ

らん恥ぢや。日ハ山の端より相の

おねて知らまらなみ嵐 袖寒しと

思へども 子の為ありが 寒さらも

落葉の積の本蔭もや嵐も塵と

ありぬらん 落葉の積の本蔭

もや落葉の積の本蔭もや嵐も塵

とありぬらん げよ世の中よ憂

事のげよ世の中よ憂き事の心よ

から塵の身ハ拂ひもあへぬ袖の露

涙の数や積らん 風よ散り水よ

浮む落葉やも志どろ 袖よ宿さん

涙の露の月の影 涙の露の月の影

とれずと見えればさもあらそ 小舟のよの

(確カニシンミリ)

(カハコト)

シテ白(静ニ確カリト)

(聊カカフテ)

シテ次弟上(静ニ寛タリト)

カヘテ(柏子合)

地(前ヲ承ケテ粘ラズ)

(シツル)

上歌(音ヲ依ナシシホリト)

とありぬらん

げよ世の中よ憂

事(打切)のげよ世の中よ憂き事の心よ

から塵(チ)の身ハ拂(ハ)ひもあへぬ袖の露

涙(イ)の数(イ)や積(イ)らん 風(ハ)よ散(ハ)り水(ハ)よ

浮(カ)む落(カ)葉(カ)やも志(カ)どろ 袖(カ)よ宿(カ)さん

涙(イ)の露(イ)の月(イ)の影(イ) 涙(イ)の露(イ)の月(イ)の影(イ)

とれ(イ)ずと見(イ)えれば(イ)さも(イ)あら(イ)そ 小(イ)舟(イ)の(イ)よの(イ)

宿さん涙の

下歌

ツヨクニキミ

玉敷音もただあはれいふまで
あま

い程よ休ま
句切ナシモ

りよ苦うの程よ休まごやと思ひひら

早(確カニズカクト)

いよ此家の内よ白桃の渡りのが

シテ(静ニ)

誰よもあはれいふぞ
しよ某がまうして

早(角立タヌヤウニ)

シテ(静ニサラリ)

いよたぐはしあはれいふぞ
も申あはれいふ

早(確カニ池ニナク)

昭君の事申さる中察申して

シテ(慎マシヤカニ)

月訪ひあはれいふぞ
又申あはれいふ

早(確カニサラリ)

の。此柳の木の下をいまら去らざして

清め給ふ。何と申したる事よそいふぞ

シテ(穂カニ)

昭君胡國へうらふ。一時此柳を植ゑ

(確カニ持シテ)

置き。あはれ胡國まで空へあはれ。此柳も

中(シツトナリト)

植ゑるもあはれいふぞ
後賢人へはや

早(和ナホ合)

片枝の植ゑる
あはれいふぞ

あはれいふぞ
昭君の事
胡國へ

遷ウツされ給ひいぞ シテクリ上(確カニ大キク) さらばも昭君胡
スル入 國クニは遷ウツされし。その古イニシくや尋マシめりよ
地(前ヲ承ケテダツフリト) 天下テンカを治シめ始ハジまり シテサシ上(總カニサラリ) 然シカれば胡
地(前ヲ承ケテ運ビテ) 國クニの軍イクサこゝろありし。從シクゴふ事コト期キ難ガシ
タガイ されば互タガは和ワ睦ボクして其シ印イン一つあから
イチニン やまて美人メイジンや一人イチニンつゝあたまをくちし約束
シクニ のありしよ 打切(拍子合) とも漢カンの言コト旨シら。

三千サンセン人の寵愛シヨウアイいづれやわくる方も
 あらもろくくの宮女ミヤメの紅ベニ色シロ紅衣ベニイの
 姿シズメや賢ケン取ケの障サマ子シは似ニせ繪エよこれや
 あらきし中ナカよ若ワカれはさまあらん見ミち
 かれや選シみて胡コの為タメは遣ツし。天下テンカ
 の運ウツや鎮チンめんと綸言リンゴンあらせ給タへた。
 敷シの宮女ミヤメ遣ツこられしと悲カナシみ繪エ

かけらる人々を談らひ。皆賂を贈りつ。序
 約束のありし由。地(前ヨリ)引上(引上テ大キク)た寫せる
 其姿。いづれを見ても妙なり。て柳
 髪風よたややうよ。桃顔露や合んで
 色猶深き姿あり。中よも照君ハ並ぶ
 方(前ハ)美入(前ハ)帝の曾見えたり。一
 あり。その地頼める故やらんた。うち解
 打切

けてありし。畫圖(分)の寫せる面影の
 あまうらやしく見え。か。その寵愛
 甚しと申せらむ。君(中)子(中)の私(中)の詞あり
 思(中)けし。力(中)なくして。眼君を胡國
 送(シテ)り。昔桃葉とびり人。
 仙女と契淡からさうり。仙女堂(ナ)く
 ありて。後桃の花を鏡よ映せ。則ち

仙女の姿見えたりのあり。此柳もなま

がら眼君の姿。いづれせ給へ鏡よ映して

影をみる。そむくは仙女の姿あり。いづ

てこもるたかむぐれ。やそのの女

あらも鏡よ。遠くへの映のあり

夢子の姿を映し。まじやしが持

ち。まも鏡。吉里や鏡よ映し。ハ

ツカレ上 (サナリ)

ツレ上 (サナリ)

あはれもいづれ旅人あり。その昔よ

年をへて。此の鏡とある水に。散り

あはれ花や。曇るら。思ひ。こも。まも鏡

も。も。姿をみるや。と鏡よ。向つて。泣

か。居たり。鏡よ。向つて。泣き。居たり。シテ。中入

これ。胡國よ。雲。され。王。眼君の。幽。霊

あり。さ。も。父母。別。を。悲。み。春。の。柳。の

後ツレ上 (昭君) ツヨク (昭君不念) 見計ラビニテ

花やハ

まも鏡もハ

ツカレ上 (サナリ)

ツレ上 (サナリ)

地上 (唯カニ兼ツカサテ)

拍子合

ツレ上 (サナリ)

ツレ上 (サナリ)

中入

本のもとも。泣き悲み給ふ痛き。よ。
 急ぎ鏡の影を映し。父母の姿を見え
 申さん。春の夜の朧月夜よあらむ
 れて。曇りあがらも。影見えん
 怨りや鬼やいきん。面影の身の
 毛もよだつてあり。いっある人まで
 まませ。鏡よりうらうら給ふら
 (後三上) (昭君ヨリ依ナニサラリ) (母) (早苗) (後三上) (拍子不合)

いら胡國の夷の大將。呼韓邪單
 于が巫妻あり。胡國の夷の人向
 あり。今見ふ姿の人あらむ。目よ入見ね
 ども音のなく。冥途の鬼や怨りや
 呼韓邪單于も望くある。同く
 (中) (下三上) (確カニ弛ミナク)

昭君が父母よ。對面の為よ来りたり
 あり。對面あり。姿を見らむ

●仕舞

怒りや （強カニドフシリト） とも怒るを謂ふは
 心よ知らぬ我が姿鏡よ寄りて見給
 へ （強カニドフシリト） 鏡よ影や映さん
 直ぐの氣陳き姿と鏡よまを寄り
 ぶく見れば怒れ給ふもあら道理や
 荊棘や戴く髪は筋ハ （強カニサハラリ）
 髪は筋ハ （位ラ大キク） 髪を離れて空はまを
 太鼓頭 （拍子合ハル）

●仕舞

地 （強カニト） 元結更なたまらねば （強カニト） さね葛もて
 結びさげ （強カニト） 耳よ （強カニト） 簪や下げたれど
 鬼神と見給ふ （強カニト） 姿も恥ぢ鏡よ
 寄りそび立つても居ても鬼と見れ
 ども人とも見えぬ （強カニト） その身やあらぬら
 われながら怒りけり （強カニト） 顔つきは
 面目ありてまを帰る （強カニト） たゞ昭君
 合方カハル （拍子合）

の。感。は。た。眼。君。の。感。は。柳。の。色。は。異。
 ち。ら。き。で。罪。や。あ。ら。ま。き。淨。玻。璃。は。そ。れ。
 も。隠。は。も。も。あ。ら。う。花。や。目。入。え。て。鼻。の。
 目。上。の。室。あ。る。物。思。景。も。ほ。の。あ。ま。に。
 日。月。の。曇。ら。ぬ。人。の。心。を。誠。や。寫。ま。
 鏡。あ。れ。誠。や。寫。ま。鏡。あ。れ。

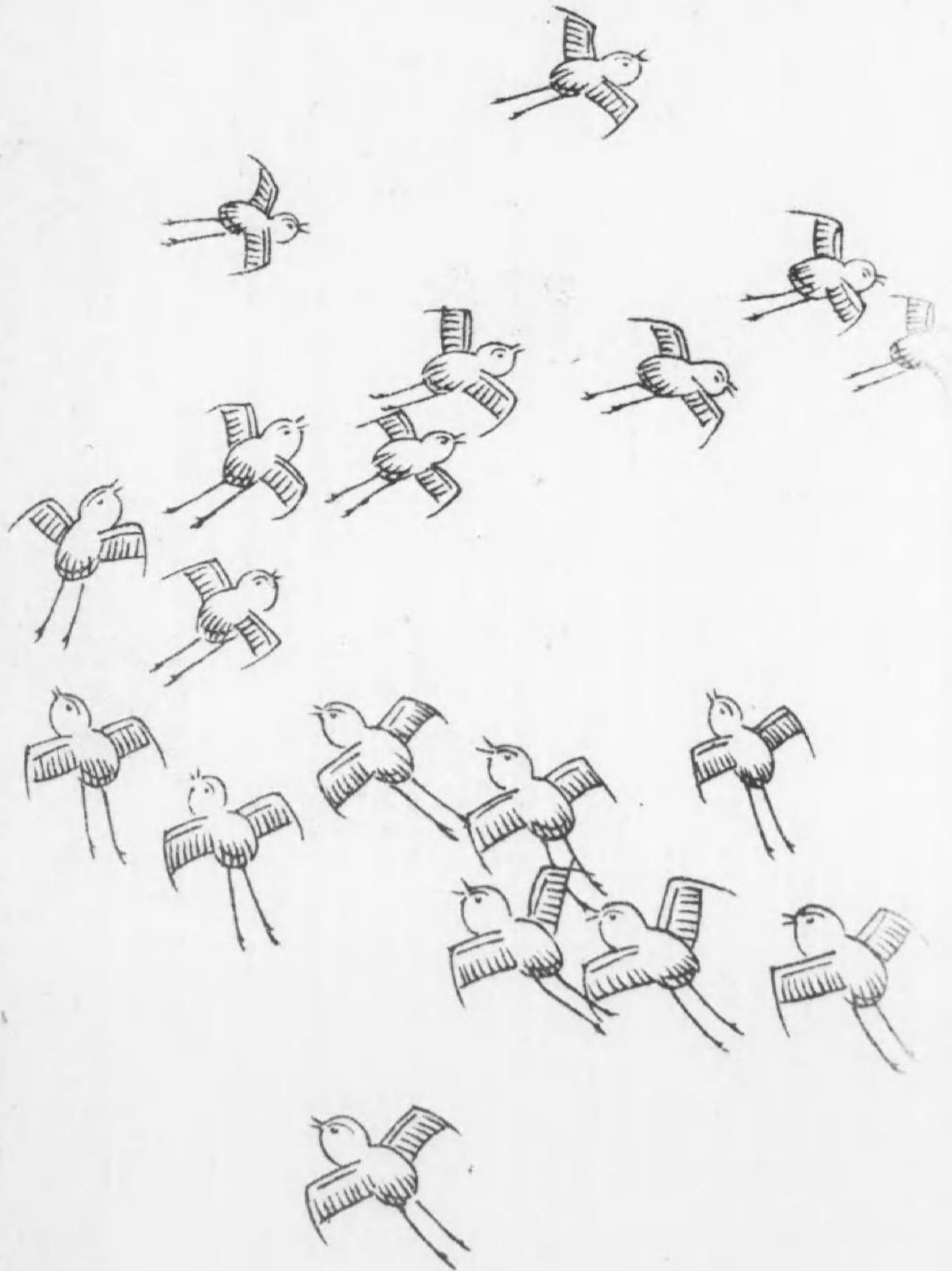
大正十四年九月十日印刷
大正十四年九月十五日發行

觀世流改訂本
大正十三年版



訂正者 丸 岡 桂
 發行者 土 辰 源 太 郎
 印刷者 鈴 木 彌 作
 印刷所 信 英 堂 印刷所
 東京市神田區東松下町十二番地
 發行所 觀世流改訂本刊行會
 東京市神田區今川小橋三丁目九番地
 電話四谷 五九五七番
 振替東京 一三四七五番

306
751



終